

手渡された五百円玉

- 繰り返しの発問を生かす授業の展開 -

- (1) 主題名 感謝と思いやりの心 [2 - (2)] 関連項目 [4 - (8)]
- (2) ねらい 思いやりと感謝の心をもち、他の人に温かく接していくこうとする態度を育てる。
- (3) 資料名 「手渡された五百円玉」
- (4) 授業の展開例

	学習活動	主な発問と生徒の心の動き	留意点
導入	1 「ありがとう」の語源について知る。	「ありがとう」という言葉は、どのようにして生まれた言葉か知っていますか。 ・めったにないことという意味だと習った	生徒が発言しやすいようになごやかな雰囲気づくりを心がける。 価値の中身に踏み込みます、簡単に触れるだけとする。
展開	2 資料前半を聞いて場面状況をつかむ。 3 私の気持ちに迫る。	資料の内容を読み取る。 なぜ、私は晴れ晴れとした気持ちになったのだろう。 ・自分が手伝ったことで、おばあさんに喜んでもらえたから ・普段見て見ぬふりをしていたが、やっと手伝うことができたから 私は、なぜ五百円玉をおばあさんに返したのだろうか。 ・自分の気持ちがお金ではかられたように感じたから ・物やお金のために、したことではないと感じたから	教師による範読 自分の行動に満足感をもっている私の気持ちに迫る。 普段、見て見ぬふりをしていた私の気持ちも確認しておく。
開拓	4 私の行為について吟味する。	私は、五百円玉をおばあさんに返すべきだったのだろうか。 ・善意はお金で買うものではないから返すべきだ	「あなたなら、五百円をどうするか」という発問で、何人かの生徒に役割演技をさせてよい。(演技の後、行為の理由を語らせること。)
	5 資料後半を聞いて場面状況をつかむ。	・おばあさんの感謝の気持ちとして受け取るべきだ	善意は代償を求めて行うべきものではないという固定観念を明確にしておく。
	6 五百円に込められたおばあさんの思いを考える。	おばあさんは、どんな思いで五百円を渡したのだろう。 ・感謝の気持ちを伝えたかった ・自分の娘のようにかわいがっていた私の優しさがうれしかったから	おばあさんの私への思いをしっかり考えさせる。
	7 背景を知った上で、再度、私の行為を吟味する。	やはり、私は五百円玉をおばあさんに返すべきだったのだろうか。 ・やはりおばあさんの気持ちを汲んで受け取るべきだった ・おばあさんの気持ちは手紙でも十分わかったし、返してよかったです	本当の好意に対しては、何かお返しをしたいと思うのが自然な感情であることを押さえれる。 代償を求めるない善意に対する、感謝の形のあり方にまで議論を高めるようにする。
終末	8 思いやりや感謝の行為の原点を確認する。	善意に対して代償は必要だろうか。 ・感謝の気持ちを表すことは大切だ ・表現のあり方こそ考えるべきだ	自発的な感謝の気持ちの表現方法を私たちは考える必要があることを押さえる。

「手渡された五百円玉」

【前半】

「ハハ、あのおばあさん近所でときどき見る人だなあ。」

ある日の登校中、駅の階段を重たそうに風呂敷包みを抱えて、一步一歩しんどそうに上がっているおばあさんの姿が田に入りました。おばあさんは背中が丸まつた体をつえで支えながら、時々足を止め、ふらつくようにして階段を上がっています。そのおばあさんは、いつも同じ風呂敷包みを重そうに持つて歩いていたので、私の印象に残っていました。

「何かしんどそう。手伝おうかなあ。でも、話したこともないし、これまで手伝ったことなんかないし……。」

私は人ごみの中、階段の下で少しためらこましたが、そのときはこつもとちがつて、自分からそのおばあさんの方に歩き出していました。

「おばあさん、荷物を持ちましょうか。」

おばあさんは、一瞬驚いたような表情で私の顔を見た後、「」めんなさいね。持つてくれる。ありがとうございます」と語って、ゆっくりと私に荷物をあげてくださいました。

その荷物は、持つてみると私が思っていた以上に重たく腕にずしりときます。おばあさんはいつもよく一人でこんな荷物を持っていたなあ……何が入ってるんだろう。私は左手に荷物、右手でおばあさんの体を支えるようにしながら、一步一步ゆっくりと階段を上がっていました。やつの思いでプラットホームにたどり着きましたが、まだ電車は到着していません。

「おばあさん。これからどこに行くんですか。」

「そりやあね。横川のお寺まで行くんよ。」

「だつたら、同じ電車ですね。電車まで荷物も持つていきますよ。」

「ええんよ。ここまで持つてきてもうただけで、じゅうぶん。ほんまありがたかったよ。」

「おばあさん、同じ電車なんだし、遠慮せんかっていいんですよ。」

しばらく待つているとホームの右手から、電車が入ってきました。私はおばあさんの荷物を持って電車に乗り込み、空いていた席を探しておばあさんに座つてもらいました。おばあさんはゆっくりと座席に座つた後、「ほんとありがとうございます。ほんと助かりました。」と話され、笑顔で頭を下げられました。私も、笑顔で頭を下げながら、そのおばあさんの表情を見て安心し、晴れ晴れした気持ちいっぱいでした。私は次の駅で降りるため、その場を離れました。立ち去る私の方を見ては、おばあさんは何度も頭を下げておられました。

私は、気持ちよく近くのドアの前に立つて外の景色を眺めていました。いつもと同じ風景、でも今日は灰色のビルも、緑の公園の木々もいつもより明るく色鮮やかに見えます。そんな風景を眺めながら、ほつとしていたとき、突然、後ろから私の腰のあたりをたたく人がいます。びっくりして、振り向くとさつきのおばあさんです。私は腰を落として、おばあさんの話を聞くつとしました。おばあさんは、小さな声で「さつきはありがとう。お礼ですよ。」これで……と言つて、白い紙に包まれたものを、私の手に握らせました。もしかして……私はその包み紙の中身を確認しようと、じつに包み紙を開いてみました。すると中には五百円玉が一枚入っています。

「えつ……。」

突然のこと驚き、私はとまどつてしましました。

「おばあさん。気持ちちはうれしいけど、お金をやりたいわけにはできません。」

「ごめんね。持ち合わせてるもんがなくて……。」

「いいえ、金額の問題じゃないんですよ。」

「いや、そういうつもりじゃなかつたんだよ。ただこのおばあちゃんは、あなたが……。」

私は、おばあさんの言葉を最後まで聞かず、お金を押し返すよつとして足早にその場を逃げ去りました。先程までの晴々した気持ちが何だか重苦しい気分になつていきました。

【後半】

「それから二、三日経つたある日、帰宅した私に母が話かけてきました。

「今日、中野のおばあさんが来られたのよ。」

「えつ。そのおばちゃんってだれ。」

はじめて聞く名前でした。

「そうねえ。あなたはちつちかつたから覚えてないかもね。このあいだ、あなたが駅で会ったおば

あちゃんよ。あなた、荷物を持って差し上げたんだって、えらいじゃない。」

「何で、おかあさんが知ってるの。」

私は何が何やらよく分かりませんでしたが、おばあさんはお礼を伝えに家に来られたのだそうです。母からおばあさんについて話を聞きました。そのおばあさんは、戦争中に家族を原爆で失い、たつた一人生き残った幼い娘さんも白血病になり、そのころ経済的な余裕がなくて治療を受けることなく、亡くなられたこと。いまは貧しかったあのころのように娘さんが空腹で苦しむまいよう、毎日のようく娘さんの墓石にお菓子や食べ物を持って行かれていること。実は私がまだ幼稚園のとき、仕事で帰宅が遅い両親に代わって、私の面倒を見てくれていたこと。今は身寄りがなく、話し相手もなく一人でさびしく生活されていることなどを聞きました。また、たまに母と会った時には、私のことをいつも気にかけてくれていたそうです。でも、なぜ私だと分かったのだろう。

「あなたのそのほくろで分かったそうよ。」

確かに私の左ほほには、少し目立つほくろがあります。おばあさんは、そんなところまでしっかりと覚えてくれていたんだ。そして母が、おばあさんからあずかったという私あての手紙を手渡してくれました。その手紙は、私あての名前が、丁寧に書いてあり、しっかりと封をしてありました。

心やさしいあなたへ

この間は、ありがとつね。ずいぶん大きくなつたんだね。歳のせいか、目も悪くなつて、すぐにあなただと分からず、普段あなたとすれちがつても、声をかけることもできませんでした。お金のこと、ごめんね。気分を害してしまつたでしきうね。ただ、何だかあなたのことが私の娘のように思えて。娘には、少しのおこづかいでさえ、満足に与えてやれなかつた。それに、あなたが小さかつたときのことを思い出してね。あなたに親切にしてもらつて、ほんの少しの間でも話し相手になつてくれて、あなたの気持ちがとてもうれしかつたものだから。これからも、元気でやさしい人であつてね。

私は、なんだかおばあさんに「悪いことしたな」とこう気持ちと、「よかつたな」という複雑な気持ちになりました。ただ、今度、町でおばあさんに出会つたら、声をかけてみよつと思いました。

活用に生かすための実践報告

「手渡された五百円玉」

1 主題の設定

この学習のねらいは、私とおばあちゃんの交流を通して、思いやりと感謝の気持ちのあり方や表現について、生徒に深く考えさせることにある。特に感謝の気持ちの表し方に焦点をあて、生徒の多様な意見を引き出しながら、感謝や思いやりの気持ちが生まれる心情にせまりたい資料である。

2 指導過程の工夫

資料を前半と後半に分けた展開を考えた。登場人物の心情にせまるため、繰り返して発問する指導過程をとっている。そのため、時間配分に十分留意し、中心発問をしっかりと生徒に考えさせたい。導入5分、展開前半部15分、展開後半部20分、終末10分（感想文を含む）の時間配分で考えたい。また、発問の多さによる思考の混乱をさけるため、ワークシートを用意し、生徒に質問事項や考えをまとめさせたり、即興劇を取り入れるなど工夫が必要である。

3 発問の工夫

中心発問を前半部で「私は、五百円をおばあさんに返すべきだったのだろうか」、後半部では「やはり、私は五百円をおばあさんに返すべきだったのだろうか」ととらえた。このとき、そう思う理由も必ず考え、答えるように指示しておく必要がある。

また、指導案には記載していないが、補助発問として「私はなぜ、足早にその場を立ち去ったのだろうか」、前半部を読んだ後で、「後半部のストーリーはどうなるかな」など取り入れても、おもしろい。

終末で、思いやりや感謝の行為の原点を確認して授業を終えたい。登場人物の行為について善悪を決めつけるような展開にならないように注意が必要である。

4 生徒の反応（授業後の感想）

生徒は、それぞれの発問について、自分の考えをワークシートに真剣にまとめていた。中心発問に対する発表では、前半部で返すべきと答えた生徒が20名中10名、もうべき6名、分からぬ4名。後半部では、もうべき13名、返すべき7名となった。理由としては、ほぼ指導案での予想と同じような考え方であった。しかし、多くの生徒の気持ちとして、感謝の気持ちを表す「ありがとう」の言葉は大切だと考えていたようである。

5 実践者からの一言

この資料は、日常生活の中で、生徒が経験しやすい状況が描かれている。実際に、同じような体験をしたことがあるという生徒も見られた。内容の読み取りはそれほど複雑でもなく、分かりやすいと考えられる。そのため、対象学年としては、第1、2学年が適当ではないかと考える。発問数が多く、やや深い思考を要求するため、生徒が授業中積極的に参加するよう、役割演技、ワークシートなどを活用し授業を展開する必要があると考える。また、いかに、生徒の多様な意見を引き出すかが、学習を深められるかどうかの分岐点であると考える。

（大朝中学校 川上貴志）